

読書への誘い

＜第Ⅲ期 第 15 号＞通巻 110 号

今年の体育祭も終わり、9月も残り僅かとなりました。今年は台風がよく発生しますね。までもや日本に接近中、とのことですが、この2、3日の雨の多さは、秋雨前線によるものだそうです。雨音を聞きながら、ちょっと本を手にとってみましょうか。

水のこころ

高田 敏子

水は つかめません

水は すくうのです

指をぴったりつけて

そおっと 大切に――

水は つかめません

水は つつむのです

二つの手の中に

そおっと 大切に――

水のこころも

人のこころも

(詩集『可愛い仲間たち』1975年刊)

『まだふみもみず』より「はじめに」&「月の輝く夜に」(檀ふみ著・幻冬舎文庫・2003年刊)

作家檀一雄の娘。高校在学中に映画デビューし、以来「女優」を仕事とする著者。振り返るたびに顔が赤くなる、でもどこか切ない「出会いと別れ」の思い出をしつとりとそしてユーモラスに描く好評エッセイ。

本書のタイトルは、百人一首の中の小式部内侍の歌からいただいた。
——大江山いく野の道の遠ければ まだふみもみず天の橋立——

小式部内侍は、小さい頃から和歌にすぐれていた。しかし、小式部の母親は、美貌の天才歌人、和泉式部である。歌に恋にと、お母さんがあまりにも有名なものだから、娘の歌も、実はお母さんが詠んでやっているのだという、まことしやかなウワサが流れていた。その母が、新しい夫について丹後の国に下ってしまった。

それから、間もなくして、都で歌合が行われることになった。バカでお節介なオトコが、小式部内侍のところにノコノコとやってきて、言った。「アンタ、歌は大丈夫なの？ お母さんから何か言ってきた？ おや、まだ何も？ そりゃまた、心配だねえ」

そのオッチョコチョイの袖をつかんで、ピシャリと詠んでやったのが、くだんの歌だという。

——母の住む丹後の国は、大江山、生野と通ってゆく、遠い道の向こうですから、あの名高い天の橋立も、まだ踏んだことはありません。

「まだふみもみず」の「ふみ」には、「踏む」と「文」が掛けてあり、「いく野」には地名の「生

野」と「行く」とが掛けてある。…

言うまでもないことだが、本書のタイトルには、もうひとつの「ふみ」つまり、私の名前が掛けてある。…

女優になって間もなく、私が二十歳そこそこの時に、父は亡くなった。「女優になったら」と勧めた張本人のクセに、女優としての仕事、映画やテレビドラマは一切見ていなかった。ただ、たまに断りきれずに書いたものには、必ず目を通してくれていて、「よかったですよ」「頑張りなさい」と折にふれ励ましてくれた。「親孝行、したいときに親はなし」とよく言うが、父の死後にできる親孝行がたったひとつあるとしたら、それはやはり書くことだろうと思う。だから、私が書いているのは、どれもこれも、父への「ふみ」なのかもしれない。(pp.12-16)

ある英会話の本に、「基本的なマナー」としてこんな注意が記してあった。
「日本人はすぐに相手の年を知りたがりますが、これは失礼です」「独身かどうかなどというプライベートな話題も、よっぽど親しい間柄でない限り避けた方が無難です」

しかし、どうだろう。ロサンジェルスに来てみると、会う人、会う人が、その「基本的なマナー」を無視する。「結婚してるの？」と訊くから「してない」と言うのと、「したことはあるの？」「どうして？」「恋人は？」と、矢継ぎ早に問いかけられる。一体、アメリカのプライバシーはどうなっちゃってるのだろう。

ある女性からは、「ニッポンのオトコはみんな威張っているから、イヤなんでしょう？」と、決めつけられた。「フミはアメリカ人とけっこうすればいいのよ」

咄嗟に、私のヘソが曲がった。「ウウン、アメリカ人とは無理だと思う」「どうして？」と、アメリカ女性はまなじりを決して詰め寄ってくる。

「月……」と、私は苦しまざれに言った。「月を語れないもの、アメリカ人とは……」

「今夜は月がきれいよ、ホラ、見てごらんなさい」

小さい頃から何度となく、そう言う母の声を聞いてきた。

——願はくは花の下にて春死なむ そのきさらぎの望月のころ——

重い病を得た父はこの歌を思い出し、病室の窓の外に月を捜した。

私にとって「月」は、かぐや姫の故郷である。母の声である。父の無念である。

この話には、非常に説得力があったらしい。

「そうね、アメリカ人とだったら、『月よ』『ああ、月だ』で、話はおしまいだものね」

しかし、実のところ、私はアメリカ男を憎からずと思っているのである。「月」に関して、彼らはそんなに絶望的なのだろうか。

「決まっているよ。そういうロマンがないからこそ、ロケットだって飛ばせるんだよ」と、口さがない日本の男は言う。「でも、アメリカの手帳に、満月の日が印刷されてるのがあったわよ。アメリカ人にとっても、十五夜は特別な日なんじゃないの？」

「ウン。犯罪の発生率がグンと上がるから、気をつけないとネ」

そういえば『ムーンストラック』という映画があった。直訳すれば、「月当たり」というふうになるのだろうか。恋に落ちてわけがわからなくなった状態のことをいうらしい。昔、狂気は月の影響と考えられていたのである。

もちろん日本では、『月の輝く夜に』というロマンチックな題名にすり替わっていた。

ロスの満月は見事だった。あの世の家族も、この世の家族も、みんな集めて、この月をウットリ眺め合えたら、どんなに幸せだろうと、つくづく思った。

満月と相前後して、カリフォルニアの各地で大きな山火事が起こった。半分は天災、半分は放火ということであった。(pp.264-266)



